

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）
研究開発領域「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」
平成25年度採択プロジェクト企画調査 事後評価結果報告書

平成26年5月15日
領域総括 林 春男

1. **研究代表者**：窪田 亜矢（東京大学 工学部 都市工学科 准教授）
2. **プロジェクト企画調査の題名**：コモンズ空間の再生がリアス式海岸集落における暮らしの再建に果たす役割に関する企画調査
3. **プロジェクト企画調査期間**：平成25年10月～平成26年3月

4. プロジェクト企画調査の概要：

東日本大震災の被災地では、復興計画が順次策定され、事業化に向けて状況は前進している。しかし、特にリアス式海岸集落において、震災前の暮らしに確実に存在していた継承すべき濃密なコミュニティへの配慮は必ずしも充実したものとはなっていない。

本企画調査では、リアス式海岸の風土・伝統により拡張していかないような小さな漁村集落の大切さに着目し、「“コミュニティがつなぐ”の一番の原形である“人が集い、繋がっていく”ためには、それぞれの地域で何かしらのコモンズが必要である」という仮説を検証するために、コモンズ空間の再生が再建に果たす役割を明らかにすることを目的とした。具体的には、「コモンズ空間とコミュニティの関係の把握・分析」と「エスノグラフィーやモノグラフ等の質的研究を工学的知見に結びつける試論の構築」を通じて、「コモンズ空間の再生プロセス」の仮説を検証し、実現させていくことを目指したものである。

5. 事後評価結果

5-1. プロジェクト企画調査の目標の達成状況

主たる調査地域である大槌町赤浜地区でヒアリングに加え、本企画調査の実施以前から積み上げてきた調査結果も引用してコモンズ空間の考察を試みたことについては一定の評価をしたい。しかしながら、計画外のことも実施したために、当初計画に割くべきリソースが不足してしまった印象を受ける。「未来においてレジリエントな地域社会であるためには、コミュニティの力がなお重要であり、それはコモンズ空間によって醸成される」という仮説の検証に対して、本企画調査の実施項目で計画の柱となっている赤浜の方々とのワークショップや学際的な視点からのヒアリングについては、対象者・時期および内容につ

いても一切述べられていない。また、実施者も自ら指摘するように、公共施設などのコモンズ空間についても現在の位置に関する分析のみに基づいた整理に留まっている。すなわち、地域の主体性とコモンズ空間の関係について分析・検討が十分なされたとは判断しがたい。

5-2. 研究開発プロジェクトの提案に向けた準備状況

「住宅再建を最優先するという考え方の中で、複合施設だけは例外的に先行が認められた」等、空間が住民生活の中で重要な役割を担う空間と住民間での意識の広がりについて、今回のような調査により様々な示唆が得られることは理解できたものの、社会実装を目指す研究開発としての最終的な成果物、アウトカム、社会的インパクト等について具体的にイメージすることができない。検証すべき仮説のみならず、そこから得られる知見から、実装すべき社会技術の抽出や実装事例までを実施できるプロジェクトをデザインしていくことを期待したい。コモンズ概念は時代や地域、語る人等によって異なるが、安全・安心コミュニティを形成する際の1つの鍵となる可能性を感じている。

研究開発プロジェクト提案のためには、なお以下のような課題が残されていると考えられる。

- コモンズ空間が、日常時の社会的ネットワークを生み出し、非日常時の避難生活を支えたものであるとすれば、その存在を活用することが南海トラフ地震想定地域の防災対策に重要であると考えられる。
- 「コモンズ空間」がどのような共有ルールを持って利用されている場所であるか等、提案者の定義をより客観的に裏付けるとともに、コミュニティで果たす役割をより明確化することが必要である。
- コモンズのありよう、維持のされ方、活用のされ方は色々な形態を取りうるはずであり、それらを客観的に把握し、基本的な説明軸を抽出していく必要がある。
- コモンズ空間を"形態"としてだけでなく"意味"として捉え、ローカルなイニシアチブにより構築されるコモンズ空間の有り様・維持のされ方・活用のされ方等に関して、どのようなインデックスでコミュニティのつながりを見極めることができるのかを明らかにすることが期待される。
- 実施体制を強化しながら目標達成のための具体的なアプローチを検討する必要がある。

以上